

2026.08.02.

「主イエスの羊」

旧約 詩編第95編1～11節

新約 ヨハネによる福音書10章22～30節

1. はじめに

イエス様が羊飼いであり、私共はイエス様の羊です。この羊飼いと羊のイメージを用いて、ヨハネによる福音書10章ではイエス様が喩えを語られてまいりました。10:11「**わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。**」これはとても有名な言葉ですね。元々この羊飼いと羊のイメージは、旧約において「羊飼いき神様、羊が神の民イスラエル」を示すものとして用いられてきました。先ほど詩編95編をお読みしましたが、7節で「**95:7 主はわたしたちの神、わたしたちは主の民／主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。**」と歌われているとおりです。また、また有名な詩編23編は「**主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。 23:2 主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い、 23:3 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。**」と歌われている通りです。ということは、イエス様はご自分が神である、神の御子・メシアであるということを、このヨハネによる福音書10章における喩えをもって明言していると言っても良いでしょう。ですから、イエス様がここで語られたことを「なるほど、そういうことか、その通りだ」と納得するということは、イエス様を神様として、神の御子・メシアとして受け入れ、信じる、ということになります。しかし、そこで二つのグループが生じます。つまり、イエス様をわが主・わが神として受け入れ信じる者たちとイエス様をわが主・わが神として受け入れない、認めないという二つのグループです。これは、いつの時代、どの国・地域でも起きます。イエス様の話やイエス様の業を知らされて、それを聞いた者がみんなイエス様を信じるようになるわけではありません。現在でもそうです。

2. 神殿奉献記念祭

さて、今朝与えられた御言葉「**神殿奉献記念祭**」が行われた時にイエス様とユダヤ人の間でなされた会話が記されています。この「**神殿奉献記念祭**」というのは、口語訳では「宮きよめの祭り」と訳されておりました。どちらも、言葉を聞いただけではどんな祭りなのか分かりませんね。少し説明しましょう。この祭りは、ハヌカと呼ばれる祭りで、現在の暦に変換しますと毎年移動しますが11月～12月に行われるものでした。この祭りは、主イエスの時代より200年ほど前の出来事を記念して守られていた祭りです。その出来事というのは、その頃ユダヤを支配していたのはセレウコス朝シリアという国でした。この国はアレキサンダー大王の東方遠征によって生まれた巨大な帝

国がアレキサンダー大王の死後、すぐに部下たちによって分割されます。これも何十年にも及ぶ戦争が繰り返された結果、ユダヤを支配したのがセレウコス朝シリアだったわけです。時にこのシリアの王であったアンティオコス 4 世エピファネスが、ユダヤ人たちにギリシャの宗教を強要し、エルサレムの神殿にギリシャの神々の像を置。そしてユダヤ人たちに拝ませたわけです。更に、割礼をも禁じました。これに対して、ユダヤ人たちは激しく抵抗し、多くの命が失われました。そして何年かの戦いの後、紀元前 164 年にエルサレム神殿にあったギリシャの神々の像を取り除き、再び主なる神様を礼拝出来るようになりました。このことを記念した祭りがこれです。神殿から偶像を一掃しましたので「宮きよめの祭り」、或いは再び神殿を主なる神様に捧げたので「神殿奉獻記念祭」と呼ばれるわけです。ヘブライ語ではハヌカです。この戦いを指導したのはユダ・マカベアという人です。そして、この時代のことを記しているのが、私共はこれを聖典にはしておりませんが、カトリックなどでは旧約の続編として認めているマカベア書 I・II です。ですから、約 200 年前にマカベアによって自分たちの信仰が守られたことを覚えて、この祭りの時にユダヤ人たちは民族的・宗教的高揚を覚えた、そういう祭りでした。

3. イエス様はメシアか？

この祭りの時に、24 節「ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。『いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。』」先ほど申しましたように、民族的高揚、宗教的高揚が盛り上がっている時です。その祭りの時に「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。メシアなら、はっきりそう言いなさい。」と言うのは、あのユダ・マカベアが自分たちを支配していたセレウコス朝シリアと戦ったように、イエス様がメシアだと言うのなら、イエス様をメシアとして担ぎ上げてローマ帝国と戦おう、そのように期待した人達がいたということでしょう。ヘブライ語ではメシア、これをギリシャ語に変換したのがキリストです。彼らが考えるメシア・キリストとはそのような者でした。しかし、イエス様はそのような人々が期待するようなお方ではありませんでした。イエス様が与えようとされた救いもそうです。人は自分の願いや期待をイエス様に投影します。こういう方であって欲しい、こういう方であるはずだ。その自分の願いや期待を実現する方としてメシアを考えていたということです。

これに対してイエス様はこう答えられました。25 ～ 26 節「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。 10:26 しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。」イエス様は既にメシアとして業を行った。私が何者であるかも語った。しかし、あなたたちはそれを信じない。何を行ったのかといえば、イエス様が羊と羊飼いの喩えを語る直前、ヨハネによる福音書 9 章において生まれつき目の見えない人を目が見えるようにされた奇跡が行われました。この癒やされた人はイエス様を信じる者となりましたけれど、ファリサイ派の人達はイエス様を信じるどころか、安息日にこのような癒やしを行うのは律法違反であり、イエス様を罪人であると断じたのでした。そして、イエス様を信じたこの

目を癒やされた人はファリサイ派の人達が指導するユダヤ人社会から追い出されてしまいます。この出来事を受けてイエス様は羊と羊飼いの喩え話を10章で語られたわけです。イエス様は生まれつき目が見えない人を癒やされ、自分が何者であるかということを、その業によって示された。また、良き羊飼いの喩えで自分が何者であるかを語られました。しかし、人々はそれを受け入れなかった。イエス様をメシアと信じなかったわけです。

イエス様は前回見たように16節で「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。」と告げられました。ファリサイ人やユダヤ人にしてみれば、メシアとは自分たちを救ってくれる方であって、その為にローマをやっつけてくれれば良かった。彼らにしてみれば、ユダヤ人以外の人達、つまり異邦人なんてどうだろうと知ったことではなかった。異邦人は神様に裁かれて滅んで当然だ。彼らが救われるなんて考えにれない、あり得ない、そう考えておりました。しかし、聖書の神様は天と地の全てを造られたお方です。ですから、ユダヤ人以外の人も造られたわけで、ユダヤ人だけを愛しているわけではありません。イエス様はまことのメシアとして来られましたけれど、それはユダヤ人だけを救われる方として来られたのではありませんでした。囲いの中に入っていない羊、つまり異邦人もまた救いへと導かれるお方として来られたわけです。そして、その救いとは「ローマ帝国の支配からの解放」というようなことではありませんでした。もっと根本的な救いです。神様との敵対関係を正し、父と子の関係へと導き、肉体の死によっても滅びない、永遠の命を与える。この救いを与えるお方として来られたわけです。

4. 主イエスの羊

人は自分の持っている考え方、理解の仕方といったものを中々変えることが出来ません。この時のユダヤ人たちもそうでした。メシアとはローマの圧政から自分たちユダヤ民族を救ってくれる方。そのために神様が遣わされた方。この理解に捕らわれたままで、イエス様が為された業、語られた言葉から「まことのメシア」とはどのようなお方なのかと考え、受け止め直す、考え直すということが出来ませんでした。そのことをイエス様は26節「あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。」と告げられました。一方、生まれつき目が見えない目を癒やされた人はイエス様を信じました。イエス様を信じないというのは、先に「メシアとはこういう方だ」というイメージなり、一定の理解があって、それに合致するかどうかで判断し、イエス様をメシアとして受け入れるかどうかを考えるわけです。この場合、判断するのは自分です。判断基準は自分が持っています。このように、信仰というものを「自分で判断するもの」と考えている人は少なくないでしょう。では、生まれつき目が見えなくてイエス様に癒やしていただいたこの人はどうだったのでしょうか？彼なりのメシアについてのイメージあって、それでイエス様を信じたのでしょうか？そうではないでしょう。彼自身、イエス様によって目が見えるようにしていただけるなんて思ってもいなかったでしょう。しかし、考えてもいなかった出来事が我が身に起きた。こんなことが出来るのはメシアしかいない。それで、感謝と喜びをもって彼はイエス様を信じる者となりました。それは彼がイエス様の

羊だったからです。彼は自分でイエス様を誰かと判断する前に、イエス様のメシアとしての業によって癒やされてしまいました。イエス様を信じないユダヤ人達とイエス様を信じたこの人との違いは、メシアについてどうのこうのと考えて自分判断基準に従ったか、それともイエス様の救いの出来事に出会ってしまったか、その違いです。この自分の判断基準というのが怪しいといえますか、当てにならないといえますか、実にはいい加減なものなんです。しかし、たいてい人はそのようには思いません。自分の考え、自分の常識、自分の正しさ、そのようなものにしがみつきます。しかし、神様もイエス様も私共の小さな頭の中で、私共が理解し、納得できるようなお方ではありません。小さく、愚かで、身勝手な自分の判断基準を神様・イエス様に適応したところで、イエス様が神の御子、メシアであることは金輪際分らないのではないのでしょうか。

5. 神様の選びによって：神様の恵みによって

私共はイエス様を信じたからイエス様の羊、イエス様を信じなかったらイエス様の羊ではないと考えます。確かに、目に見えるところにおいてはそうなのでしょう。しかし、イエス様はここでそうは言うておりません。イエス様は 26 節「**しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。**」と言われました。「あなたたちは私を信じないから、わたしの羊ではない」とは言われません。「わたしの羊ではないから、私を信じない」と告げられました。つまり、イエス様の羊であるかどうかは、イエス様を信じた結果ではない。そうではなくて、イエス様の羊だから、イエス様を信じたということです。27 節でも「**わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。**」と告げられます。イエス様の羊だからイエス様の声を飼い主の声として聞き分ける。そして、イエス様の言葉に従う。つまり、イエス様を信じる者となり、イエス様に従って歩むということです。イエス様を信じるのは、イエス様の業と言葉が分かるのは、イエス様の羊だからだとイエス様は告げられました。逆じゃありません。そして、イエス様はご自分の羊を知っておられる。このことを生まれつき目の見えない人について当てはめれば、イエス様はこの人がご自分の羊であることを知っており、それ故にイエス様は目を癒やし、癒やされた人はイエス様を信じた、ということです。私共もそうです。イエス様の羊としていただいた私共ですけれども、どうして自分がイエス様の羊としていただいたのか、その本当の理由は分かりません。イエス様が、神様がそのようにお決めになられたからとしか言いようがありません。ありがたいことです。

ここで一つ確認しておかなければならないことがあります。それは「誰がイエス様の羊であるか」は、神様・イエス様しか知らないということです。私共は分かりません。今はイエス様をわが主・わが神として受け入れず、信じられない人でも、イエス様から見れば「自分の羊である」人はいます。その人はやがて時が来れば、イエス様を「わが主・わが神」と告白することになるでしょう。それが何時なのか、それが誰なのか、私共は誰も知りません。しかし、神様はご存知です。そして、神様がお決めになったことは必ず実現することになっています。私共は、神様が分からないとか、

イエス様の復活が信じられないとか、こんな信仰で良いのかとか思うことがあるかもしれません。しかし、そのように自分の心の中を覗いてみたところで仕方ありません。私共はどこまで行っても罪人であり、不信仰な者なのです。そして、そのような者を救うためにイエス様は来られました。イエス様は素直で、信仰深くて、真面目な人を救うために来られたものではありません。このことはどんなに強調しても強調すぎということはありません。これが福音だからです。そもそも、そんな絵に描いたような良き人などいませんし、私はそんな人に会ったことはありません。確かにみんなそれなりに良い人です。でもそれなりにです。神様から見れば、私共はみんな五十歩百歩です。それでも神様は私共を愛しくくださる。それがイエス様を与えてくださった私共の神様です。

6. 永遠の命を受ける

では、イエス様の羊とされた者にはどんな救いの恵みが与えられるのでしょうか？イエス様の羊とされるということは、イエス様のものとされる、イエス様が主人となられるということです。これが大切です。私共は自分の欲の支配、罪の支配、サタンの支配のもとに生きるのではなくて、神様・イエス様の御支配のもとに生きる者になったということです。そして、イエス様はご自分の羊の全てをご存じであり、必要の全てを備えてくださいます。それは、日々の生活に必要なものだけではありません。御国に至るために必要な信仰・希望・愛・平安・喜び・感謝・交わり・祈り、そして家族も友人も仕事も、全てを備えてくださいます。そうは言っても、大変なことや、悲しいこと、或いはどうして？と言いたくなるようなことだって起きます。先週の火曜日に起きた熊本の地震だって、今も余震が続いていますが、被災された方のことを思えば「神様、どうして？」と問わざるおえません。私共は、この世界で起きる出来事の全てを説明することは出来ませんし、そこにどんな神様の御心があるのかを知ることも出来ません。それは私共が人間だからです。しかし、神様はご存知です。神様には何かお考えがあるのでしょうか。私は御国において、イエス様・神様と顔と顔を合わせて相見える時、全てをお聞きしたいと思っています。そして、それを楽しみにしています。

イエス様は 28 節で「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」と告げられました。イエス様の羊は、決して滅びません。この肉体の命は尽きようとも、私共の命が終わることはありません。私共はイエス様から「永遠の命」を与えていただいているからです。これがイエス様によって救われたということです。この永遠の命は、イエス様が復活されたことによって明らかに示されました。あのイエス様の復活の命が私共にも与えられています。これが救われたということです。このイエス様によって与えられた救いは、ユダヤ人達が考えていたメシア像、ローマ帝国の支配から抜け出すという救いとはなんと違うことでしょう。ですからイエス様は誤解されることがないように、敢えて自らがメシアであるという言葉を使われなかったのでしょうか。「自分がメシアである」と告げれば、それを聞いた人達の「メシア像」を自分にかぶせてくることが分かっていたからです。彼らのメシア像、キリストのイメージ

は実際のイエス様とはかけ離れたものだったからです。イエス様の羊としていただいた者は、イエス様から、また父なる神様から引き離されることは決してありません。イエス様、神様よりも力を持つ者などこの世界には存在しないからです。

7. イエス様と神様は一つ

さて、イエス様は最後に 30 節で「わたしと父とは一つである。」と告げられました。これこそ、イエス様がご自分が誰かということを明確に告げられた言葉です。イエス様は天地を造られた神様とご自分が一つだと宣言されました。この言葉はユダヤ人達の想像を遙かに超えた言葉でした。天地を造られたただ独りの神様、全宇宙でさえこの方を入れることが出来ないほど大いなる方が、どうしてこんな小さな一人の人間と一つであることがあり得るのか。こんなことは、ユダヤ人達の想像の外のことであり、想像することさえ出来ないことでした。しかし、これがイエス様というお方なのであり、ユダヤ人達がメシアと呼んで待ち望んでいた方は、実はこのような方だったということです。これは後に、キリストの教会において三位一体の神と言われることになる神様の姿でした。これはユダヤ人達の想像を遙かに超えたことだったに違いありません。イエス様は父なる神様と一つですから、天地が造られる前から神様と共におられ、その創造の御業にも参与されました。そして、神様の御心と一つであられましたので、私共の罪の裁きを全て我が身に担うために、私どもを救うために十字架にお架かりなされました。そして、三日目に復活され、天に昇られ父なる神様の右におられます。そして永遠から永遠まで、全ての者の上に臨んでおられます。これが私共の主イエス・キリストです。今、この方を心から誉め讃えたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

あなた様は今朝、聖書の言葉を通して、私共一人一人に必要な御言葉をもって語りかけてくださり、霊の糧を与えてくださいました。私共がイエス様の羊として、まことの良き羊飼いであるイエス様を愛し、信頼し、お従いしてことが出来ますように。あなた様は私共の愚かさも、弱さも、身勝手さも、罪も、全てご存じです。全てをご存じの上で、私共をイエス様の羊として御国へと導いてくださいます。ありがとうございます。そのあなた様の動かぬ救いの御意思の中で、私共が健やかに新しい一週も御国に向かって歩んでいくことが出来ますよう、聖霊なる神様の導きによって、心から祈り願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン